

# 自転車リペアハブから生まれるまちの未来

リペアステーションのあるモビリティハブの可能性：すべての人に、すべての移動を

## グローバル×ローカルな実践から

### はじめに

自転車をはじめ、多様なモビリティや循環型社会への対応として、自転車とリペアステーションを備えたモビリティハブの新しいかたちを考えます。自転車は今や、電車・バス・飛行機・次世代モビリティなどと共存・補完しながらまちを編み直す“媒介ツール”としての役割を担っています。経済・観光・環境・社会・教育・医療福祉の分野でその価値が再評価されています。本発表では、国内外の事例を通じて、公共空間の再設計と移動の質の向上による、持続可能なまちモデルの可能性を探ります。

### 事例

国・地域	プロジェクト名・概要	取り組み (空間設計・運用・連携)	リペアステーションの役割	社会的意義・連携可能性 (SDGs・CSV)
ポーランド・シヴィエクラニエツ地域	Transport Hub Świętchłowice：バス・自転車・自動車・空港アクセスを統合した乗継拠点	電気自動車充電設備・駐車場・バス停・空港アクセスを一体化。建設時に樹木を一切伐採せず、緑地と共存する設計を実現。市民・観光客の利便性と環境価値を両立が図られている	自転車預かりポートと修理エリアを併設。リペアステーションが設置され、利用者のセルフメンテナンスを支援。2023年4月導入以降、利用頻度も高く、地域の交通利便性向上に寄与している。	多様なモビリティの接続、観光誘致、環境配慮型都市設計 / 脱炭素・交通統合・地域活性を通じた共通価値の創出に貢献
アフリカ ガンビア (チェコ連携)	Czech Bikes for Gambian Schools (CBGS)：チェコ国内で回収・整備した自転車をガンビアの農村部の学校へ寄贈。2012年開始	約8000台の廃棄予定であった自転車と修理設備を提供。自転車整備係の育成、工具・マニュアルの提供、教育省と連携した持続的運用体制を構築。現地での定着が進み、教育支援の一環として機能している。	メンテナンス知識と共に修理ステーションを学校敷地内に導入。現地の子どもたちが自立的に整備可能となり、通学環境の改善にもつながっている	教育機会の拡充、技術移転 / 交通アクセスの改善 / 国際教育支援と技術普及を通じた価値共創モデル
スイス・ジュネーブ	CERN Green Village：環境負荷を抑えた「町の中の町」構想（総敷地面積624ha）、CERNキャンパスを活用した持続可能な技術の実証・連携拠点として運営	キャンパス全体を持続可能なモビリティの実証フィールドとして活用。職員向けの自転車貸出、e-bikeの導入、サイクリングルートの整備などを通じて、環境負荷の少ない移動手段を促進。利用者の満足度も高く、継続的な改善が進められている	都市設計・環境政策・モビリティ実験の先進拠点である施設内の持続可能な交通インフラの一部として導入。日常的な整備支援に加え、技術実証の一環としても活用されている	グリーンエコノミー推進、研究機関による社会モデル提示 / 脱炭素技術の実証と社会実装による共通価値の創出
ネパール・カルトゥングラ	世界最高地点の自転車アクセス支援：山岳地帯の集落において、自転車を活用した通学・物資輸送支援を展開と地域住民が協働。	NGOが寄贈した自転車を地域で共有。修理技術の伝達と、集落内での自立的運用体制を構築。地形に応じたルート整備も実施され、地域の生活基盤強化に貢献している	電源不要のリペアステーションが山岳地帯で活躍。観光客と地元住民の両方に貢献。2022年11月、標高3540m地点に導入され、世界最高地点級の事例として注目されている	環境配慮型インフラ促進。生活支援と地域自立 / 地域交通と生活基盤の改善を通じた持続可能な価値創出
ドイツ・ベルリン	Testfeld Fahrradparken：ベルリン中央駅、その他駅前広場・再開発エリアに修理設備・駐輪場・案内サインを統合配置。市民ワークショップや現地テストを通じて設計を調整し、地域ニーズに即した運用の可能性が高まっている	ベルリン中央駅、その他駅前広場・再開発エリアに修理設備・駐輪場・案内サインを統合配置。市民ワークショップや現地テストを通じて設計を調整し、地域ニーズに即した運用の可能性が高まっている	備群の一部として設置。利用者の声を反映しながら、2025年7月導入。市民参加型の交通改善モデルとして評価されている	公共空間の改善、交通の多様性、政策形成への市民参加 / 官民・市民が協働する都市改善の価値共創モデル
オランダ・ロッテルダム	Bike Repair Station Rotterdam (地元共同体Kongssi)：移動支援・環境配慮・地域文化の醸成を推進。2022年7月開始。	公共空間・企業・学校・医療施設などにリペアステーションの設置支援。住民・自治体・企業が共同で設置・運用。廃棄物削減と資源共有を通じて、持続可能な都市文化の醸成が進んでいる	市内3か所に設置。個人所有を前提としない「共有型インフラ」として導入。ワークショップやDIY修理を通じて市民の自立支援が促進されている	移動の自由と環境負荷低減 / 経済的包摂とリペア文化の普及による循環型価値の共創
日本・京都市	かろがも薬局 SDGs取り組み：地域の健康支援、医療・福祉と地域交通をつなぐ新たな地域拠点として機能	通院・介護・買い物など生活動線に寄り添った設計を実現。福祉施設や訪問看護との連携も視野に入れ、地域の健康支援と移動支援を両立するSDGs実践として展開。地域住民からの評価も高く、継続的な活用が進んでいる	薬局前の公共スペースを活用し設置。地域住民が気軽に自転車整備できる環境を提供。2023年9月導入以降、日常利用が定着し、生活支援インフラとして機能している	健康増進、地域福祉、持続可能な交通支援 / 医療・福祉・交通をつなぐ地域共創型の価値形成



### その他、事例はたくさんあります



### リペアステーションとは？



自転車の空気入れや工具を備えたセルフ式のリペアスタンドです。  
24時間・365日利用でき、ヨーロッパを中心に世界中で約20,000台が設置されています。  
本発表で紹介している事例では、すべてポーランドのIBOMBO社が開発したステーションを活用しています。  
開発・製造元：IBOMBO sp. z o.o.  
国内総代理店：All Bikes Japan合同会社

事例はこちらからもご覧いただけます



### リペアハブから見える未来

世界各地の先進事例から、リペアステーションのあるモビリティハブが、移動の自由と都市の包摂性を支える力を持っていることが見えてきました。それは、単なる設備や交通拠点ではなく、環境負荷の低減やリペア文化の普及を通じて、人と人、人とまちをつなぎ、地域に持続可能な循環を生み出す仕組みとして機能しています。今後も、地域に根ざした取り組みとグローバルな視点をつなぎながら、誰もが使いやすく、開かれた公共空間のあり方を検討していきます。そして、自転車が自然に選ばれる移動手段として定着し、地域の挑戦とともに、自転車利用環境の向上につながることを目指して取り組みを進めたいと考えます。